National Parks of Japan

西海国立公園

海と生きる、自然とともに紡ぐ時間

国立公園ものがたり

西海国立公園

海と生きる、自然とともに紡ぐ時間

国立公園ものがたり

西海国立公園と
ともに歩む

日本の国立公園は、アメリカなど世界のいくつかの国立公園と異なり、集落や農林水産業などが行われている地域も含めて公園区域に指定していることから、公園内に人々の暮らしや産業があるのが大きな特徴です。そのため、国立公園の管理は、これらの人々の暮らしや産業などとの調整を図りながら、地域の人々とともに進めています。

本誌の舞台である西海国立公園は、公園区域の大部分が海に面しており、複雑な海岸線や碧い海、大小の島々からなる多島海など、美しい自然景観を見ることができます。また、多くの渡り鳥や大陸系の植物が見られ、大陸との繋がりを感じることができることも、西海国立公園の魅力といえるでしょう。

西海国立公園に暮らす人々は、そのような自然景観を常に身近に感じながら、山や海からの恵を存分に享受してきました。年齢とともに地元を離れていく人がいる反面、この地域「ならでは」の魅力に気付き、自然環境の保全や地域の活性化に力を尽くしている人も多くいます。本誌『国立公園ものがたり』では、この魅力に気付き、この地域を愛してやまない人々の声を集めました。

『国立公園ものがたり』は、国立公園制度100周年となる2031年にかけて行う「国立公園制度100周年記念事業」の一つとして、日本のすべての国立公園において作成する聞き書き集です。この『国立公園ものがたり』を通して、地域の宝である国立公園の自然、その自然とともに生きてきた人々の歴史、文化、ストーリーを見つめなおし、次の世代、次の100年にしっかり引き継いでいただけることを願っています。

聞き書き集とは、話し手に自身の生き様を語ってもらい、その人の言葉をそのまま書き起こしてまとめたものです。口調や方言などもそのまま文章化することから、読み手は話し手の人柄や感情をリアルに感じ取ることができます。
地域の人が紡いできた国立公園のストーリーを、地域の言葉でお楽しみください。

目次

04　西海国立公園
島々と海が織りなす、生命の楽園

九十九島

08　［聞き書き］宮本博文さん
絶滅の恐れがあるミサゴが身近にいる
この豊かな自然は「当たり前」じゃない

12　［聞き書き］伊藤一喜さん
自然観察調査や漂着ゴミ回収を通じて
野鳥が飛び交う豊かな環境を次世代へ

平戸

16　［聞き書き］邑上益朗さん
平戸は、大陸に一番近い地域
その豊かな自然を次世代に受け継ぐ

五島列島

20　［聞き書き］大瀬良澄男さん、利恵さん
疲れた心を癒すために、みんなが
「ただいま」と戻ってこられる若松島に

24　［聞き書き］木寺智美さん
島の魅力を多くの人に伝えることで
小値賀島の歴史を未来へつなぐ

28　［聞き書き］福見直樹さん
地元のダイビング仲間を増やして
まだ見ぬ「五島の宝」を見つけたい

西海国立公園

果てしなく広がる空と海。
海に浮かぶいくつもの島々。
ここで暮らす人々は、昔から自然とともに生き、
その恵みを享受してきました。
そして今、その魅力に気づいた新たな人たちも加わり、
この土地の自然や文化を、
次の世代に引き継ごうとしています。

島々と海が織りなす、生命の楽園

西海国立公園は九州西北部に位置し、佐世保の九十九島（くじゅうくしま）から生月（いきつき）・平戸（ひらど）島、そして五島列島へと続く大小４００近い島々からなる公園です。海食崖、外洋性多島海景観など多様な海岸景観が特徴で、特に平戸島から福江島にかけては、さまざまな火山地形も観察することができます。こうした複雑な地形に対応して、多様な生態系が形成されています。また、秋に東から西へ、北から南へ向かう大規模な鳥の渡りも見どころで、「渡り鳥の十字路」と呼ばれています。

指定年月日｜1955 年 3 月 16 日
面積｜陸域 2 万 4646 ヘクタール、海域公園地区 30.4 ヘクタール
エリア｜長崎県

西海国立公園主要スポット

九十九島

大小 208 の島々からなる美しい景観地で、豊かな自然と多様な動植物が魅力です。島の地形・地質の特性から、佐々川河口を境に「北九十九島」と「南九十九島」に分かれており、展望所ごとに個性あふれる景観を楽しむことができます。

多々良島・屋根尾島（下五島）

多々良島は福江港の北東沖合約 6 km地点、屋根尾島は福江港の北東沖合約 3 km地点にある無人島です。いずれもダイビングのポイントとして知られ、多々良島のポイントでは、世界最大級（全長約 14 メートル）のオオスリバチサンゴが観察できます。

渡り鳥の十字路

日本の最西端に位置し、大陸とも近い九十九島には、野鳥のサンクチュアリ（聖域）と言われるほど数多くの野鳥が生息しています。また、東西に渡る鳥と南北に渡る鳥が交差する「十字路」になっているため、多くの渡り鳥が観察できます。

若松瀬戸（上五島）

中通島と若松島の間の瀬戸。大小の島々が複雑に入り組んだリアス海岸の特徴がよく現れています。潜伏キリシタンが迫害を逃れるために身を隠していた「キリシタン洞窟」は、若松港から船で 10 分ほどのところにあります。

小値賀島

農業や漁業など、自然と共存する暮らしが今も息づいている小値賀島。懐かしい日本の原風景が残り、自給自足や物々交換などが日常的に行われています。島の生活を体験する民泊や古民家ステイなど、「暮らすように旅をする」観光に力を入れています。

川内峠（平戸）

玄武岩の溶岩台地の山で、ススキ、メガルカヤなどの草原が広がっています。現在は野焼きによって良好な草原環境が保たれているため、草原性の植物や昆虫類が豊かで、希少種のタイワンツバメシジミの生息も確認されています。

聞き書き
宮本博文さん

絶滅の恐れがあるミサゴが身近にいる この豊かな自然は「当たり前」じゃない

学生時代に冒険家・植村直己の著書に感銘を受けて以来、多くの国々を旅してきた宮本さん。「大阪で生まれ育ち、美しい海を知らなかった自分にとって、豊かな自然の中に希少な動植物が暮らす西海国立公園九十九島は『特別な場所』」と語ります。地元の子供たちに、いつか「あの自然は、当たり前じゃなかったんだ」と気付いてほしいという想いから、今日も多くの人たちに「気づきの種」を提供しようと奮闘しています。

みやもと・ひろふみ／1966年生まれ。大阪府門真市出身。青年海外協力隊の隊員などを経て、小値賀島のNPO法人「おぢかアイランドツーリズム協会」に入社。子供を対象とした自然体験活動などを指導する。2019年より「西海国立公園九十九島ビジターセンター」センター長を務める。子供たちからは「もっさん」の愛称で親しまれている。

「自分らしい生き方」を求めて世界を旅した青春時代

2019年から、西海国立公園九十九島ビジターセンターのセンター長を務めています。今にして思えば、ここに至るまでには紆余曲折とともに、さまざまな「縁」がありました。

大学2年生の夏休みに、富士山の山小屋でアルバイトをしているとき、たまたま植村直己さんの『青春を山に賭けて』という本を読んで、それが、すごくおもしろくて。で、大学を中退しようと決めたんです。目的のない学生生活にモヤモヤしたものを感じていたんですよね。

無人島での磯観察

それで、アルバイトが終わって家に帰ったときに、家族に「大学をやめたい」って言ったら、親父から「やめてなにするんや？」と聞かれて、とっさに口をついて出たのが「旅がしたい」という言葉でした。正直、そこまで深く考えていたわけじゃなかったんですけど、当時、アルバイトはいくらでもあったんで、「就職したら負け」ぐらいに思ってたんですよ。当時はたくさんいたと思います。僕みたいな若者が。

それで、その後数年間は、アルバイトをしながら自転車やバイクで北海道をツーリングしたりしていました。すごく楽しかったんですけど、なんか自分の旅のイメージとちょっとかけ離れてるっていうか、モヤモヤは晴れなかったんですよね。

そんなある日、同級生のいとこと話してたら、「ワーキングホリデーでオーストラリアに行ってた」と言うんです。「ワーキングホリデー？なんじゃそりゃ」って思って調べてみたら、そのビザを取れば、外国で仕事をしながら生活することができるらしい。「これだ！」と思って、さっそくニュージーランドに行ったんです。ちょうどキウイの収穫が終わった後で、今の時期なら剪定の仕事があるっていうんで、3ヶ月畑仕事をしたのち、古いトヨタのステーションワゴンを買って、車でニュージーランドを縦断し、フィジー経由でカナダに渡りました。

その後、一度日本へ帰ってきて、カナダのワーキングホリデービザを取ってカナダに行きました。カナダでは、冬はスキー場の日本食レストランでアルバイト、夏はユーコン川のカヌーツーリングに行きました。この頃はカヌーイストの野田知佑さんの本を読んでいて、その自由な旅のスタイルに憧れてたんです。750キロメートルぐらいの距離を17日間、川辺でキャンプしながら下っていくんです。楽しかったですね。その後は、青年海外協力隊の木工隊員としてソロモン諸島やポツワナ共和国へ行ったり、知り合いに頼まれてドイツの寿司屋で3年間働いたりしてました。

ドイツから帰国した後、たまたまJICA（※）のホームページを見ていたら、「おぢかアイランドツーリズム協会」というNPO法人の求人につながるリンクがあったんです。求める人材の項目に、「要英語力」「アウトドア活動の経験者」……と書いてあって、それ見たらもう全部当てはまってて、「まさに俺のことじゃないか！」と思ってすぐに電話をして、採用されました。初めて訪れた小値賀島の印象は、時間がゆっくりと流れている雰囲気が、ちょっとソロモン諸島に似ているなと感じましたね。

おぢかアイランドツーリズムでは、小値賀島の隣にある野崎島というほぼ無人島でのガイドや子どもキャンプの指導をしてました。僕自身はバイク旅行とか自転車旅行とかで、個人的にはキャンプ経験は豊富でしたけど、仕事として子供たちを受け入れてキャンプをするっていうのは初めてだったんですよね。

だから、今にして思えばプログラムも、「○時から魚釣り、○時からは海水浴」となんの意図もなく前年にやったものをコピーして、とにかくスケジュールをこなすことに精いっぱい。「集合しろ！」「早くしろ！」と常に大声を出しつづけているような状況でした。それでも、子供たちは僕を「もっさん」とニックネームで呼んで慕ってくれるんです。なにより、海で泳いだり、カヤックしたり、魚釣ったり、自然の中で生き生きと楽しむ子供たちの姿を見るのがうれしかったですね。「これが島の力だ！」と感じると同時に、自分の仕事を見つけたような気がしましたね。

ところが、ある年の夏のキャンプやったかな？ショッキングな出来事があったんです。

プログラム終了後には、キャンプスタッフたちが、子供たちを佐世保と博多の港まで船

※ 国際協力機構

ビジターセンターで配布している「九十九島自然ガイド」

子供シーカヤック探検隊　九十九島の無人島に向かう

で送っていくんですね。僕は博多行きのフェリーだったんですけど、船の中でも、子供たちはものすごい元気でした。だから僕のイメージでは、別れのときも笑顔でこちらを振り返って「もっさんバイバイ！」って手を振りながら元気いっぱいに帰っていくもんだと思っていたんです。

ところが実際は、みんな親元に戻った瞬間にシュンってなって、もう振り向きもせずに帰っていったんですよね。その姿に衝撃を受けて……。後で聞いたら、子供たちは家では塾とかピアノとか習い事をいっぱいしているみたいなんですよ。いつも親からは「早くしなさい」と怒られ、学校でも「あれしちゃダメ、これしちゃダメ」と言われてるらしいんです。その話を聞いてハッとしましたね。彼らは野崎島へ来て、窮屈な日常から解放された喜びを爆発させてるわけです。なのにキャンプに来てまで「早くしろ」だの「あれしちゃダメ」なんて言われたら、たまったもんじゃないですよね。大声を出すだけの指導者ではだめだと反省し、いろんなところで勉強しました。それからは本当に怒らないし、大声も出さなくなりました。

おぢかアイランドツーリズムに2年間勤めた後、佐世保観光コンベンション協会が受託した「ガイド養成事業」の募集があって、いろいろ勉強させてもらいました。船舶免許をとったのもこのときですね。そして、約1年間のガイド研修が終わった後にハローワークに行ったら、九十九島ビジターセンターの短期求人が出てたんですよ。で、そのときは1年間だけ仕事をして、その後は熊本の知人が運営するNPOでアウトドア関係の仕事を手伝ったりしていたんですけど、今から6年前に、ビジターセンターの管理運営を受託している「九十九島水族館海きらら」の館長（当時）から「センター長が辞めることになったので、来てもらえんか？」という誘いをいただいて、お引き受けすることにしたんです。

なにより大切なのは子供たちに「感じてもらう」こと

ビジターセンターが行っている事業は、西海国立公園の自然の魅力を伝えることです。海だけじゃなくて山もですね。子供たちに自然に興味を持ってもらおうとすると、環境問題とか、ゴミ問題とかも出てくるわけですが、それを小学生に言ってもね、嫌いになるじゃないですか、難しいから。

たとえば「ここの海がきれいなのはなんでなのか？」「ここの海が汚いのはなんでなのか？」っていうのは、まず興味を持ってもらったその先に考えてもらえばいいことです。「それを解決するために、自分はどう動くか？」っていうのを考えてもらいたいんです。僕らがセンターでお話しするのは30分ぐらいなんですけど、たった30分でそんなことは不可能じゃないですか。できたとしても、それは洗脳ですよね。イベントにしたって、たった1日のイベントで全部は伝えきれないと僕は思ってるんです。

とにかく「きっかけ」ですね。きっかけづくりをやって、あとは大人になってからそのうちの何人かが「そういえば、あのときこんなこと言ってたな」って思い出してくれれば……っていうスタンスで僕はお話ししてますね。

プログラムが終わった後に、「今日の感想を聞かせてください」って言ったら、ある人が手を挙げて、「講師の○○さんは物知りだっていうのがよくわかりました」みたいな（笑）。そういうことが実際にあるんですよね。

僕はそういうのは絶対イヤなんで、とにかく「考えるのではなく、感じてもらう」ことをなにより大切にしています。

この豊かな環境で暮らすことは当たり前じゃない

「子供たちが、自分は佐世保出身なんや、って自慢できるような話をしよう」って思いながらいつもお話ししてます。子供たちは、高校卒業まではここにいますよね。進学や就職で都会に出て行って、ほとんどの子はそのまま帰ってこない……彼らにとっては、生まれたときからこの環境にいるんで、当たり前じゃないですか。そこが当たり前じゃないんだよっていうのを僕は言いますね。

僕は大阪出身で、海と言えば汚い海しか知らない。油が浮いているような海で泳いで、自分が釣った魚を食べた経験もない。こんないいとこないんやで、って言っても、多分わかんないですよね。

実際、ここを出て今は関東のほうにいる人が、「昔はなんとも思わんかった、なんなら好きじゃなかった。田舎だし。でも今はこっちへ帰ってきたくてしょうがない。こんないいとこで私育ったんだ」って言うんですよ。そういうところ、僕はよそ者だからわかるんです。

実は先日、この近所に住んでる、昆虫が大好きな中学生が来たときに、一緒に来た友だちと「俺たちって、なんかすげえ恵まれてるんじゃない？」って話してたんです。そんな姿を見ると、しみじみうれしくなりますね。僕は毎朝、車を駐車場に停めてここまで歩いてくるんですよ。そしたらヨットハーバーがあって、遊覧船が見えてきて……「ここが僕の職場なんですよ」って誰かに自慢したくなるんです。すごい幸せやなぁ、と思いますね。

昔に比べたら多分環境が悪くなってると思うんですけど、まだまだ自然は残されてて、ミサゴとか準絶滅危惧種って言われてるのが、もう普通に、佐世保駅の近くの高速道路のへりに止まってますからね。昨日なんか魚くわえて飛んでるのを見ましたよ。カラスに追っかけられてました。毎年、同じ岩の上に巣を作るんです。遊覧船から見れるんですよ。

今ビジターセンターでは、夏休みや冬休みにここへやってきて、友だちと宿題をしたりする「常連」の子がいるんですよ。

先ほどお話しした小学生の頃から通ってきている中学2年生の男の子は昆虫に詳しくて、ビジターセンターに展示されている昆虫のほとんどは、彼が持ってきてくれたもの。標本づくりの手伝いもしてくれる「心強い助っ人」です。

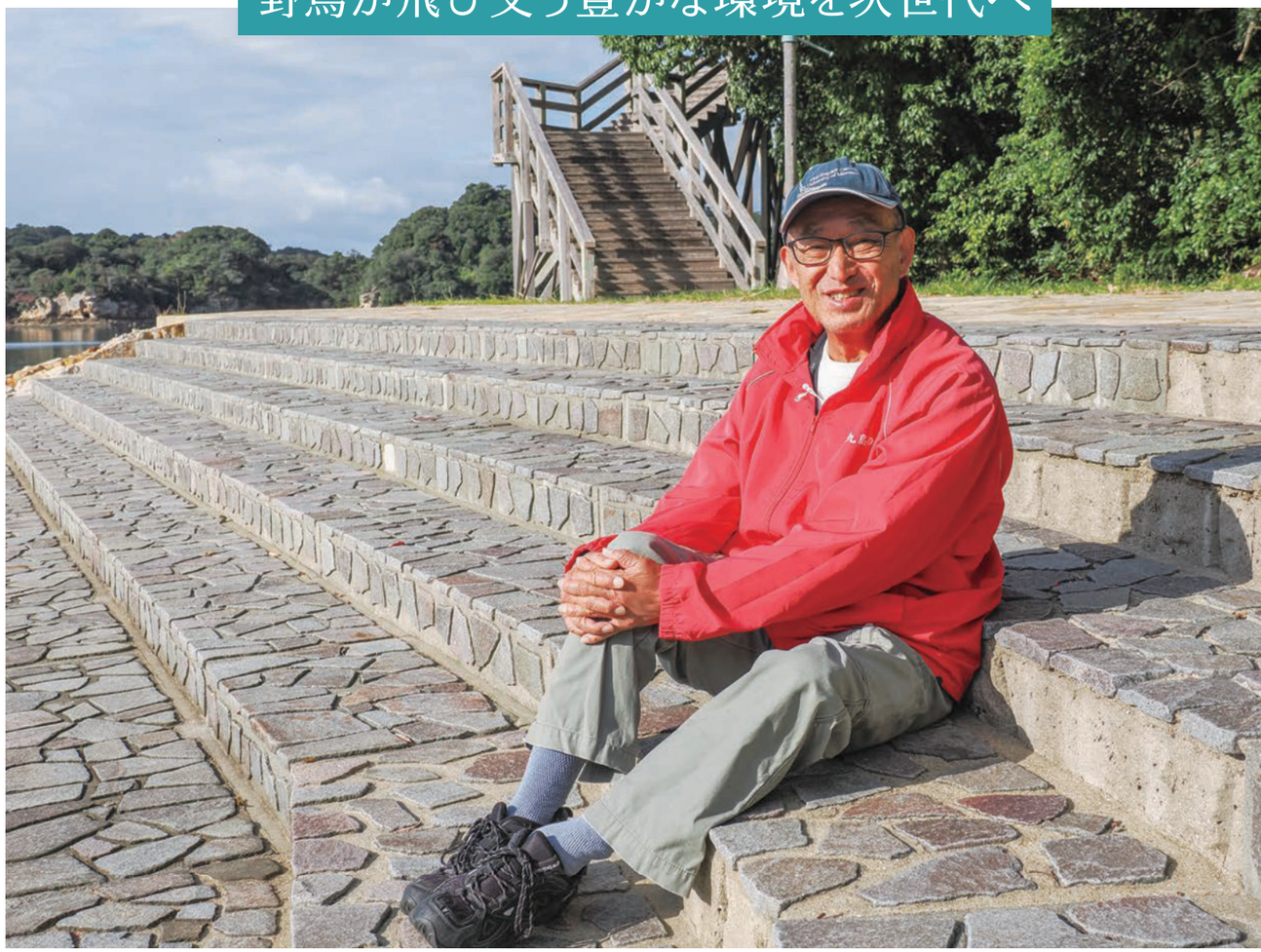
小学3年生のときに学校の授業で水族館を見学した女の子は、自分でレポートをまとめて、水族館とビジターセンターに持ってきてくれました。その子は今6年生ですけど、最近では海藻に興味を持っていて、「九十九島の会」に入会して調査研究を続けているそうです。年明けには、長崎県生物学会で発表するんだって、うれしそうに話していました。

そんなふうに、ここでの体験がきっかけで生き物や自然が好きになった子供たちが、将来、就職先としてこのビジターセンターを選んでくれたら……最近は、そんなことを夢見ています。

昆虫好きの男の子が作成した標本も展示されている

聞き書き
伊藤一喜さん

自然観察調査や漂着ゴミ回収を通じて野鳥が飛び交う豊かな環境を次世代へ



「ツバメが群れをなして南へ渡っていく様は、まるで天の川みたいなんですよ！」ボランティアグループ「九十九島の会」の伊藤一喜さんは、目を輝かせてそう語ってくれました。少年時代から九十九島の自然と親しみ、野鳥への関心をきっかけに、九十九島での自然観察調査や漂着ゴミ回収に長く取り組んできた伊藤さんに、九十九島に寄せる思いや、活動の今後について話をうかがいました。

いとう・かずき／1954年生まれ。佐世保市出身。佐世保市役所職員、九十九島動植物園森きらら職員を経て、2017年にボランティアグループ「九十九島の会」に入会。2019年から2022年まで会長を務める。現在も事務局長・メンバーとして九十九島の自然観察調査や漂着ゴミの清掃などを行っている。

魚が釣れるのがうれしくてしょうがなかった

小学生の頃は、この鹿子前町（かしまえちょう）のあたりに貸しボート屋や渡船の乗り場がいくつかありましたんで、父に連れられてよく島へ遊びに行ったもんです。

当時は島の名前も知らなかったですけど、後から思えば牧の島や長南島（ながはえじま）だったですね。砂浜があるところで泳いだり、釣りをしたり。楽しかったですね。九十九島だけじゃなくて、近くの川の河口によく魚釣りに行ってましたね。

干潟でゴカイを掘って、それを餌にしてね。アラカブ（カサゴ）やクサビ（ベラ）、クロ（メジナ）なんかがよく釣れました。当時は魚が釣れるのがうれしくてしょうがなかったですよ。

小学校4年生になると、町のソフトボールチームに誘われて、6年生までソフトボールに熱中しました。佐世保は昔からソフトボールがさかんで、各町内に少年ソフトボールチームがあったんです。選抜大会っていうのが秋にあって、6年のときには、その大会に出て準優勝しました。

中学に入ると軟式野球に夢中になって、野球ばっかやってましたね。だから、もちろん高校でも野球部に入部しました。でも、夏の大会の前に辞めてしまったんです。厳しかったっていうのもありますけども、根性がなかったってことですね、早く言えば。それまでは野球一筋の生活でしたから、もう一大事みたいな感じやったですね。

そこから「野球を辞めてなんばやろうかな？」と考えているときに、真っ先に思い浮かんだのが「動物」やったんです。

当時は町に野良犬がいたんですけど、私は犬たちを観察しながら、「人懐こい犬と、懐かない犬がいるのはなんでなのかな？」なんて考えてましたね。それに『野生の王国』とか、ああいう番組が好きで、毎週テレビを観ながら、「いつか外国に行って野生動物の研究をやってみたいな」なんて思ってました。

そんなこともあって、高校を卒業すると日本大学の農獣医学部畜産学科に進み、畜産学科を卒業した後、獣医学科に編入しました。だから大学に8年ぐらい行ってんですよ。

卒論のテーマに野鳥を選んだこともあって、在学中に「日本野鳥の会」に入会して、大学の近くにあった駒沢公園で、シジュウカラの繁殖分布を調査していました。

大学を卒業すると、佐世保市役所に就職しました。役所の中には、獣医師を置かなければいけない業務があるんです。私は、と畜検査、食肉衛生検査、食品衛生、狂犬病予防、動物愛護なんかの仕事をしていました。役所勤めの傍ら、日本野鳥の会で野鳥の調査なんかもやってました。鳥類標識調査のために必要な「バンディング資格」を取得したのもこの頃ですね。

「九十九島の会」に入会し念願だった野鳥の生態調査に携わる

市役所を定年退職した後は、「九十九島動植物園森きらら」に獣医として入社しました。ある時、動植物園の部長から「九十九島の会のメンバーが野鳥の調査をやってるんだけど、みんなに野鳥のことを教えてやってくれんか」って頼まれたんです。

長崎や福岡のあたりは、昔から「渡りの十字路」と言われていて、北から南に渡る鳥と、東から西へ移動する鳥の両方が混在する地域なんです。そういうのがあったんで、「いつか九十九島で野鳥の生態調査ができないかな」と昔から思ってて……だから私にとってはまさに「渡りに舟」だったわけですよ。それで「やりましょう」と引き受けたんです。

それからは、動植物園に出勤する前に調査の指導をして、月に1回、調査のために九十九島に通うようになりました。今にして思えば、これが九十九島の自然と深く関わるようになったきっかけですね。

九十九島の会は、佐世保市が1999年を「九十九島の年」と定め、市民からメンバーを募集して「九十九島の数調査研究会」を設立したのが始まりです。この研究会で約40人のメンバーが約1年半かけて調査した結果、島の数を「208」と発表しました。現在でもこの数が市の正式な九十九島の数となっています。

そして、調査をする中で、「九十九島の自然についてもっと知りたい」と思った有志たちが、2001年に「九十九島の会」を設立したんです。九十九島の会の「活動の目的」には、「活動を通じて西海国立公園九十九島における『海と島』の豊かな自然に関して理解を深めるとともに、この豊かな自然を次世代へ継承し、更には佐世保市の観光振興に寄与する事を目的とする」と書かれています。

穏やかな入り江では、SUP やカヌーを楽しむ人も多い

コゲラ（佐世保市花高の花高中央公園にて 伊藤さん撮影）

2024年のハマジンチョウ調査（伊藤さん撮影）

私は、動植物園で2年間勤務して退職するときに、九十九島の会の事務局スタッフとして参加してほしいと頼まれて、2017年に入会しました。だから今年で8年目になりますね。

九十九島の会では、環境省の「グリーンワーカー事業」として、5つの島で自然観察調査と漂着ゴミ収集を受託しています。

5つの島のうち、トコイ島に自生するトビカズラと、北九十九島の大島という無人島に自生するハマジンチョウの調査を毎年行っています。

ハマジンチョウについては、九十九島が自生の北限とされてるんですが、株が周辺の樹木に覆われて、日当たりが悪くなって衰弱した状態でしたので、樹木の伐採が行われたんですよ。そこで、生育環境回復のためのモニタリングを行ってきました。

調査は2015年から開花期に年1回行いました。参加者10数名が船で大島へ渡って、3ヶ所あるハマジンチョウの生育地で、株数、高さ、幅、奥行き、周囲を巻尺で計測し、開花率を調べたんです。

今年、10年間の調査結果をグラフ化して、当時の自然保護官と2人で論文にまとめたんですけど、調査開始時には3群あった生息地のうち2群は枯れて消滅してしまい、今は1群だけになってしまいました。

衰退の原因として、私たちが論文で考察しているのは、第一に台風の影響です。台風が五島側を通ると南風が吹くんですが、過去の台風記録を調べてみると、佐世保では、その年に2回の台風が来て、木が倒れる目安とされる30メートル以上の風を記録していたんです。

もうひとつは、年々、潮位が上がっていること。潮位が高いと台風のときなどに陸地の土がえぐられて、植物の根がやられてしまうんですけど、それが原因じゃないかと考えています。今後は、被隠樹木の剪定などなんらかの方法で保全していく必要があるでしょうね。

ミサゴの繁殖状況調査と漂着ゴミの回収

九十九島の会では、九十九島の環境への理解を深めようと、希少種であるミサゴ（タカの仲間）の繁殖状況調査を、させぼパール・シー（※）と合同で進めてきました。そして、その調査を論文にまとめて、長崎県生物学会誌に寄稿しました。

ミサゴは毎年同じ場所で産卵するんですよ。巣を使う個体は変わっても、新しく来たミサゴは、すでにある巣をリメイクして使うんですよね。九十九島ビジターセンターと、九十九島定期遊覧船の船長が、2017年度から毎年行っていた調査の結果から、どこで営巣しているかはわかっていました。

南九十九島では4月初旬に産卵して7月初旬にヒナが巣立つので、2021年の3月から6月までの間にのべ8回、調査船に乗せてもらって、7島で確認した9個の巣を船の上から観察して、どういう植物に巣をつくるかを調べたんですよ。すると、海側に突き出た場所で、海面から10～15メートルの岩やクロマツの上部に巣をつくっていることがわかったんです。

また、数多くの無人島が近接している南九十九島では、他の地域に比べて巣が集まった状態にある可能性があることもわかりました。おそらく、エサになる魚が多くて、無人島なので天敵も少ないからでしょうね。

今後は、北九十九島でも調査をして、比較できたらおもしろいと思ってます。九十九島は希少種のミサゴがいる魅力的な場所だってことを、一人でも多くの人に知ってもらいたいですからね。

自然観察調査ともうひとつ、活動の大きな柱が漂着ゴミの回収です。九十九島は大小の島が集まっていますから、風や海流に乗って流れてきたゴミが打ち上げられるんですね。毎年回収しているんですけど、それでも次の年には数十キロのゴミが集まります。ゴミの種類は、川から流れてきた生活ゴミ、漁具、そして外国から流れ着くゴミ。大きく分けてこの3種類です。

集めたゴミは、以前は佐世保市の環境部に引き渡すだけだったんですけど、これもデータを取って科学的にやらんといかんなと思って、私が会長になってからは、ゴミを種類別に分別して計量し、データを記録するようにしています。

最近では、「グリーンワーカー事業」とは別に「島再発見事業」として、本土側でも相浦川河口の牽牛崎（けんぎゅうざき）で漂着ゴミの回収と自然観察を行うようになりました。

地元の社会福祉協議会の協力でボランティアを募ってるんですけど、世の中でSDGsの機運が高まっているからでしょうか、参加したいという団体が、年々増えてきてるんですよ。国立公園や自然環境に対する人々の意識が高くなってるのを感じますね。

繁殖状況調査で発見したミサゴの巣（長南風島南端の岩上 伊藤さん撮影）

※ 九十九島水族館海きらら、九十九島動植物園森きららなどの管理運営を行っている企業。

一人でも多くの市民に自然環境の魅力を伝えたい

会の設立から25年経って、メンバーの平均年齢は70代前半と高齢化が進んできています。メンバーの人たちとは「毎年同じことしてても代わり映えせんから、なんかおもしろいこともせんばね」なんて話してます。

九十九島の魅力を知ってもらおうと、毎年開催している活動写真展もそのひとつです。最初のうちは、会員たちが撮影した、希少植物や野鳥、海の風景なんかの写真を展示してたんですけど、最近では、新たに調査研究の成果をパネル展示するコーナーを設けるとか、少しずつ趣向を変えてきています。

その成果かどうかわかりませんが、3年前に新たに小学生が入会してきたんですよ。現在5年生の女の子なんですけど、彼女は「佐世保の魚屋さん」を調べてるんですよね。そういう研究発表も展示するようになってきました。あとは、漂着物を集めている人が展示したりですね。写真ばっかりだった頃と比べると、けっこう魅力的なイベントになってきたんじゃないですかね。

今後は、若い世代の参加者が増えてくれるとうれしいですね。2019年までは年に1回、子供たちを島に連れていって自然観察や魚釣りを楽しむ「子どもエコツーリズム」というイベントもやってたんですけど、安全管理の体制を整える必要があるっていうことで今は一時休止してるんです。今年、安全管理規約を定めたので、体制が整った段階で、ぜひ再開したいですね。

地元の人たちにとっての九十九島は、あくまで「身近な観光地」という感じですね。ここが国立公園っていうのは、あんまり意識してないんじゃないかなぁ。ただ、新しく入会を希望する人たちに話を聞いてみると、「一度でいいから九十九島に船で渡ってみたい」という人が多いんです。

市民の人たちには、ただ「眺めを楽しむ」だけでなく、ぜひ実際に九十九島に足を踏み入れて、ここにしかない自然環境の魅力を感じてほしいですね。同時に、漂着ゴミの実態を知ってもらうことで、自分の生活を見直すきっかけにしてもらえたらうれしいと思っています。

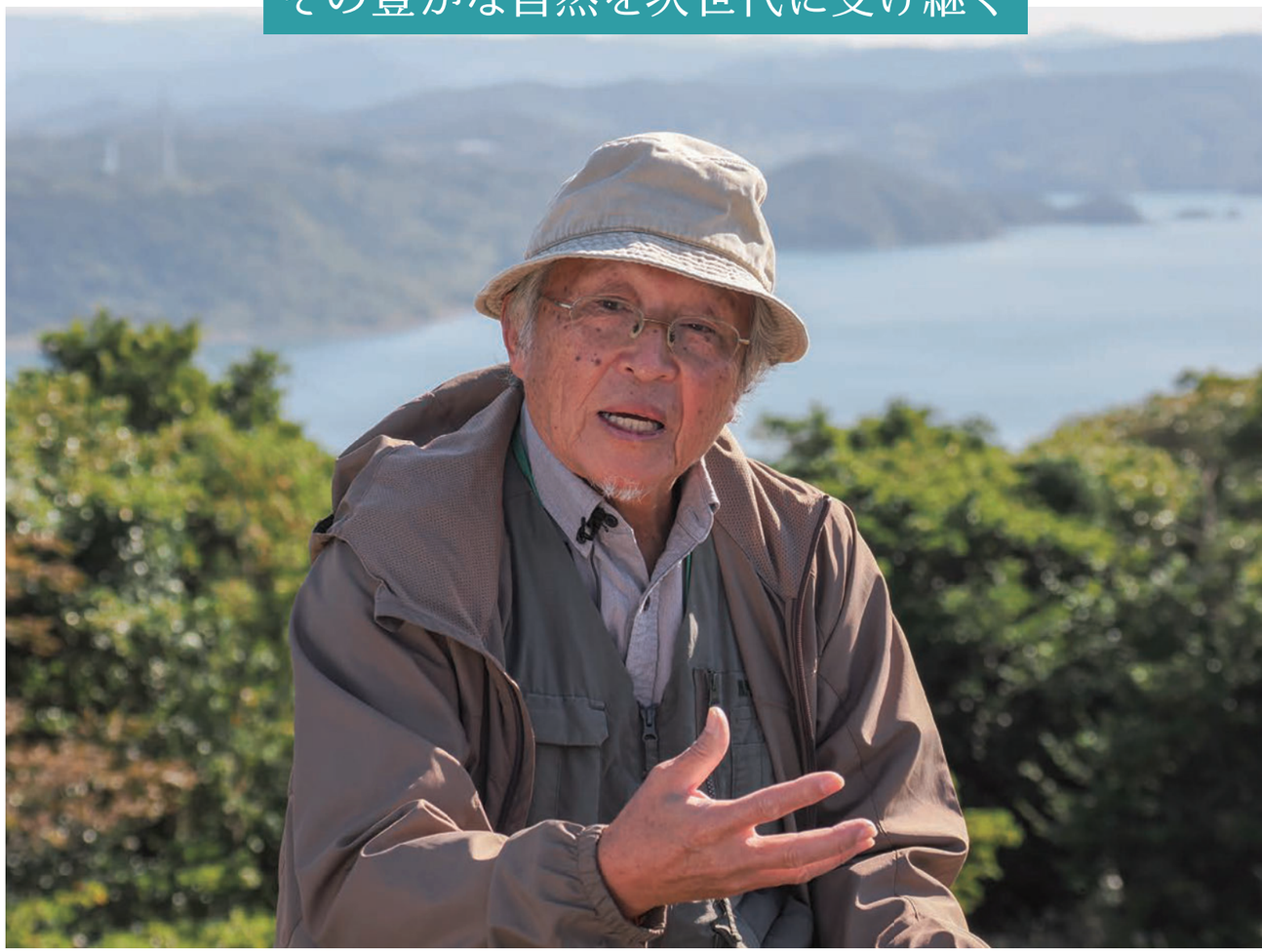
私自身、九十九島に調査に通うようになって、あらためて「やっぱりここは渡り鳥の十字路なんだ」と実感しています。

3月頃に日本へ渡ってきて繁殖したツバメ類が、8月頃から暖かい東南アジアに帰っていくんですけど、9月の下旬ぐらいに九十九島の上空をものすごい数の群れをつくって渡っていくんです。まるで天の川みたいなんですよ。今後は、そういうのを観光資源として全国にアピールすればいいんじゃないかと思いますけどね。

私たちの活動が、少しでも「西海国立公園九十九島」の魅力を伝える力になれば……そんなふうに思っています。

聞き書き
邑上益朗さん

平戸は、大陸に一番近い地域
その豊かな自然を次世代に受け継ぐ



「将来は、人と自然をつなぐような仕事をしたい」
中学校の理科教師、高校の生物教師を経てNPO法人に身を転じた邑上益朗さんは、その後、平戸の自然や文化、歴史を多くの人に伝える活動を続けています。「野山に出て、地域の豊かな自然に直接ふれることで、はじめてその大切さを理解することができるんです」と語る邑上さん。平戸の自然についての調査・研究を行い、それを人々に伝えるため、今日もフィールドへ足を運んでいます。

むらかみ・ますお／1949年生まれ。対馬市出身。「平戸の自然・文化・歴史研究会」理事長。平戸の希少動植物の調査・研究を行う傍ら、「緑の少年団（※）」活動の学習指導、「ひらどツーデーウォーク・エコトレッキング」のルート開拓・ガイドのほか、各種観察会・トレッキングで講師・ガイドを務めるなど、平戸の自然の魅力を伝える活動を行う。

※公益社団法人国土緑化推進機構のもとで国土緑化運動を後押しするために設立された団体。子供たちが、緑と親しみ、緑を守り育てる活動を行う。

生き物に魅せられて 対馬中を歩いた少年時代

私は対馬で生まれました。祖父の時代に漁師として対馬に移ってきたんです。親父は役場勤めで、しつけには厳しかったんですが、やさしくて自然が好きな人でした。だから、幼い頃はよく親父に連れられて山や川、海で自然に親しんだもんです。

昆虫少年だったんで、小学生の頃はよくチョウチョの採集とかやってましたね。他の昆虫も好きだったんですけど、特にチョウチョが好きで、高校生まで続きました。

対馬には「迷蝶（めいちょう）」といって、普段は棲み着いてないチョウチョが風に乗ってやってくるんですよ。特に秋から冬にかけては台風多いでしょ。その風に乗ってやってきて棲み着くんです。その時期は、ちょうどそばの花が満開で――対馬は「対州（たいしゅう）そば」で有名ですけど――真っ白な花に止まったりするわけ。それを、補虫網を持っていって捕まえるんですよ。そば畑の中に寝転んで、チョウチョが来たらパッと起き上がってね……そんなことをやってました。

「南平戸海と山のサバイバル塾」での海岸実習

高校では生物部に入って、チョウや貝類の調査・研究で対馬のあらゆる地域を歩いてました。生物の先生と仲良くなって、その先生もチョウをやっておられたから、標本をあげたりとか、幼虫が捕れたら持っていったりしてましたね。

リュウキュウムラサキというきれいなチョウがいて、これはサツマイモに産卵するんです。また、メスアカムラサキっていうチョウは、スベリヒユっていう植物に産卵するんですよ。そんなふうに、卵を見つけたり幼虫見つけたりすると、記録をつけて先生に見せに行ったり。成虫はきれいだから標本にして持っていったり……そういうことで先生と近しくなっていったんです。

私は大学を卒業して高校の教員になりたかったんですけどなれずに、最初は中学校の教員になったんですね。そのとき、先生がまだその高校に在職されていて、私を呼んでくれた。そのおかげで私は高校の先生になれたんです。この先生には、後に仲人までしてもらいました。

大学は、広島大学の理学部生物学科に進みました。生物学とはなにかっていったら、「生命とはなにか」を探求する学問です。生命とはなにかを探求するんやったら、生物はみんな細胞からできてるんだから細胞をなんとかせないかんと。で、細胞を勉強するためにはどうすればいいかっていったら、細胞1個でできてる生き物が一番いいんじゃないかってことで原生動物をテーマに選んだんです。

シラヤマギク

大学時代はアルバイトでお金を稼いで全国をヒッチハイクで旅しました。お金がないから、1万円でもあったら旅に出よったですね。今でも印象に残ってるのは、高知県の柏島です。沖の島という島にお寺があって、そこの和尚さんが貝類のコレクションをやっておられたんです。それを見せてもらいに行きました。忘れられない思い出ですね。

大学進学を考えはじめた頃から漠然と、「将来は、人と自然をつなぐような仕事をやりたいな」って考えていました。それで、卒業後は、中学校の理科教師を経て高校の生物教師になったんです。

けど、教員生活を続けていくうちに、「教科書に載っている勉強よりも、野山に出てやる勉強の方がいいな」って思いがどんどん膨らんでいったんです。実際に生き物に触れられるしね。誰かが紙に書いたものを読んでいるだけでは、本当の理解なんかできないと思うんですよ。

平戸島南部に位置する上段の野。メガルカヤの草原が広がる

そこで、教師生活35年になるのを機に、「もう早めに辞めようかね」って辞めて、「ひらど遊学ねっと」というＮＰＯに入って「自然遊学塾」という名前のもとに活動しはじめたんです。

子供たちに、平戸の自然の魅力を伝えたい

その後、平戸で植物が好きな方がいらっしゃって、私に「先生、平戸に生物や自然を対象にした研究会を作ってもらえませんか

「南平戸磯焼け対策Ｇ・Ｂクロス」による海藻調査

か？」って言われたんです。それがきっかけで２０１０年に「平戸の自然・文化・歴史研究会」を設立したんですね。そういう経緯があって、「自然遊学塾」は、平戸の自然・文化・歴史研究会の「自然部」として編入されました。

ひらどツーデーウォークとの縁は、私が自然遊学塾の代表として実行委員会に入ったときから続いていて、エコトレッキング部門全体を任されてるんです。

ひらどツーデーウォークは、本来は街歩きが主体なんですけど、それだけじゃおもしろくないっていう方もいらっしゃるんでエコトレッキングを入れたんです。ただ、トレッキングルートの開拓から調査、設定まで全部やらないといけないんで、準備はたいへんですよ。毎年同じコースやってたら、お客さんが減るでしょ。だから違うコースを設定しないといけない。そのためには、山ん中の道なき道を歩かないといけませんからね。

１つのコースの定員が20名なんですけど、参加される方は、小学生から80代まで幅広い年代の方がおられます。最近では「安満岳（やすまんだけ）・春日集落コース」っていうのを毎年やってるんです。やっぱり世界文化遺産を体験するコースは欠かせませんからね。このコースだけは定員30名なんですけど、やっぱり人気がありますね。

それ以外では、「緑の少年団」の学習指導を年間10回ほどやっています。

それまで「南平戸海と山のサバイバル塾」ていうのをやってまして、これは２０１０年から16年まで9回やりました。

国立公園エリアですけども、高島っていう島があって、そこに分校があったんですが、閉校になった後、その校舎を有効活用できないかということで企画したんです。

２泊３日で、子供たちはそこに寝泊まりしながら、釣りや山登り、海水浴をしたり、包丁の研ぎ方を学んで魚を料理したり、あるいは島に上陸して島体験をしたりとかね。とにかくいろんなことを体験させるんです。対象は小学４、５、６年生。定員40名で、観光協会にお願いして募集したら、福岡県や佐賀県からも子供たちが大勢集まったんです。これこそが、私が一番やりたかったことなんですよ。

ただ残念なことに、「南平戸海と山のサバイバル塾」は、事情があってやめざるを得なくなったんです。で、なにか代わることをしないといけないなと思っていたところに、ある学校から「緑の少年団をやりませんか？」っていう話がありました。２０１７年のことです。二つ返事でやりはじめて、今は私が中心的な指導者になってるんですけどね。

森や学校林の観察や世話、食べられる野草を探す、ミノムシを探す、カマキリの卵塊を探す、ツバキの森づくり……とにかくいろんなプログラムを作りますから、準備もたいへんなんです。それでも、もう8年間続けてきました。

今は、後を引き継いでくれる人材づくりが課題です。ただ、こういう仕事の後継ぎっていうのは簡単にはできないんですよね。小さい頃から自然を体験して「好き」な人でないとできないんです。

だから「緑の少年団」の中で、ちょっと変わった生徒はいないかな？　ひとりで虫を集めてるような子はいないかな？　と探してるんですけどね。

あっ、有力候補が1人いるかな？　その子は、指導が終わった後に校長室でお茶飲んでたら「校長先生、入っていいですか？」って入ってきて、「先生にこれ持ってきました」ってね、枝にオオカマキリの卵がついてるやつを持ってきてくれたんです。「ありがとう。なんで持ってきてくれたの？」って聞いたら、「だって先生、カマキリ好きなんですよね？」ってニコニコして帰っていきました（笑）。そんな生徒が毎年1人はいるので、期待してますけどね。

平戸地域で暮らして感じる地域の自然、人、文化の魅力

平戸島は、約２０００万年前の火山噴火によってできた島です。だから、礫岩（つぶていわ）、佐志岳（さしだけ）、志々伎山（ししきさん）のような典型的な浸食火山地形や、川内峠、安満岳などの溶岩台地などが分布しています。海の中に島があって、海岸があってつながる景観……これが国立公園になった理由かなと思うんですよね。そういうところがやっぱり魅力かな。

あとは大陸に近くて、氷河期の陸橋や対馬暖流の影響を受けた変化のある自然が残っていて、大陸系の動植物が生息・生育していること。氷河ができると、川の水が海に流れ込まないから海の水がどんどん引いていって、それまで海の底だったところが陸になるんです。そこを伝って氷河期に大陸からの動植物が入り込んできた……だから私は「大陸に一番近い地域」って表現するんですけど、日本のどの地域と比べても、大陸系の動植物が数多く生き残ってるんですよ。

たとえば南部にある礫岩一帯の岩場なんかは貴重植物の宝庫で、平戸島の固有種イトラッキョウ、氷河期の遺存種であるチョウセンノギク、チョウセンニワフジ、イワシデ、ダンギク……他にもたくさんあるんですけどね。さらに、これまでの調査では知られていなかった植物もあるんですよ。これを今、資料にまとめているところなんです。

人々の純朴な気質も魅力です。平戸大橋が

邑上さんのフィールドのひとつ、川内峠からの風景。平戸大橋が見える

できる以前は、平戸は孤立した島だったから、特に「島の中の地方」に行くと、そういった気質が残っていますよね。特に年配の方々は、そういう純朴さ、素朴さを持っておられて、たとえば自分で育てた野菜を持ってきてくれたり、釣れた魚を持ってきてくれるんですよ。そういった昔ながらの近所づきあいが残っているのも特徴ですよね。

「海藻の減少」で感じる平戸の海の環境変化

身近なところで平戸の環境変化を感じるのは「海藻」ですね。ここ10年ぐらい、海岸の植物の調査をずっとやってきたんですよ。調査は干潮のときに行くので、海藻や魚、貝類が目に留まりますよね。それで海藻を調べはじめたんですけど、7年ぐらい前から、前年に見られた海藻が見られなくなってきてるんです。具体的には、アラメとかクロメっていうカジメの仲間が特に減っています。私が一番好きなのはハバノリっていう海藻なんですけど、最近はこれも見つからないんですよ。メジナやブダイなんかが食べるんですね。メジナは本来、動物食の魚の臭みがあるんですけど、冬が来て海藻食になると、それがなくなるんです。だから2月ぐらいに料理して食べるとおいしいんですよね。

うちではメジナとハバノリの煮付けをよく作ってたんですよ。これがうまくてねぇ。その時期に飲み会なんかするときには、酒の肴として出す。これがなんとも良くてですね……それができなくなっちゃったのは、悲しくて寂しいですよ。やっぱり気候が変わってきたからでしょうね。

平戸は海に囲まれてるから、海藻がなくなると、魚がいなくなる。魚がいなくなると、漁師という職業が成り立たなくなる。そうなると漁業に関連する仕事もうまくいかなくなって、いろんなところに影響が及びますよね。それが問題だなって思うんです。

そのためになにができるかといえば、やっぱりそういう現状を、多くの人に知ってもらうことだと思うんです。そのために今、写真集を出版する準備をしたり、海藻を研究してるところを訪ねて話を聞いたりしてるんです。

今後は、ますます海水温が高くなってくるでしょう？　そしたら寒いところの海藻は育ちにくいわけですね。だから、今まであったものじゃなくて、暖かいところの海藻を育てるような方法を考えたほうがいいんじゃないかと考えはじめてます。

そうすれば、藻場ができて稚魚が育つし、産卵の場所もできるし、餌ができるから魚が育つっていうつながりが戻ってくると思うんです。そんなことを考えてるんですけど、なかなか時間が取れないんですよね。

そういう意味でも、やっぱり「人づくり」が大事になってきます。今後は、後継ぎ的な人材、団体、グループ、研究機関……そういったものを作る仕事にも注力していきたいですね。

聞き書き
大瀬良澄男さん、利恵さん

疲れた心を癒すために、みんなが「ただいま」と戻ってこられる若松島に

西海国立公園の一部である若松瀬戸は、五島列島の中でも、複雑なリアス海岸が織りなす静かな内海を楽しめる特別なエリア。大瀬良澄男さん、利恵さん夫妻が案内するクルーズ船ツアーは、地元の人たちも知らない「若松瀬戸の魅力」を凝縮した内容で、訪れた観光客を楽しませています。「若い頃には、島の魅力に気付くことができなかった」という二人ですが、島外での生活を経験し、今は「ここにしかない魅力」を多くの人に伝えようと奮闘しています。そんな二人に、若松島での生活や、将来に向けた思いなどについて聞きました。

おおせら・りえ／1974年生まれ。新上五島町中通島出身。高校卒業後に島を離れ、長崎市などで仕事をした後、1997年に若松島へ戻り結婚。観光クルーズ船ではガイド役を務めている。

おおせら・すみお／1973年生まれ。新上五島町中通島出身。専門学校進学時に島を離れ、長崎市などで仕事をした後、2003年に中通島へ戻り結婚。内航海運の貨物船の航海士として仕事をした後、2024年に観光クルーズ船の運航会社「ＧＯＴＯ真光クルーズ」を起業。

島外での生活を経て島へ戻り観光クルーズ船事業をスタート

澄男　僕は中通島の北部にある大瀬良という地区で生まれました。山の上の集落だったんで、海に行くのは夏休みとか、まとまった休みがあるときぐらいかな。普段は木登りしたり、虫を捕まえたりして遊んでました。

　中学校を卒業して専門学校に進学するタイミングで島を出て、いろんな仕事をして、何年か後に中通島に帰ってきました。島で家内と知り合って結婚したんですけど、島の仕事はあんまり給料が良くなかったので、思い切って内航の貨物船の仕事に就きました。そして2024年の1月1日に観光クルーズ船の運航会社「ＧＯＴＯ真光クルーズ」を立ち上げ、1年を過ぎたところです。

利恵　私は若松島の若松地区で生まれ育ちました。子供の頃は、春や秋にはレンゲの蜜を吸ったり、椎の実を集めたり、栗を拾ったりするのが遊びでした。夏は海に潜って貝を獲ったり、魚釣りをしたり……中学時代は、部活が終わると海に直行して、シャワーを浴びる代わりに海に飛び込んで汗を流していたんですよ。ずぶ濡れになって帰っても、家に着くころにはすっかり乾いてるっていう（笑）、今にして思えば、ほんとにのどかな日々でしたね。高校卒業後に進学のために島を出て、短大を卒業してからは長崎市内で販売の仕事をしていたんですが、23歳の時に若松島に帰ってきました。その後、島で仕事をしているときに主人と知り合って結婚したんです。

若松港を出港して間もなく、若松大橋の下を通る

澄男　もともと「飲食店の経営とか、夫婦で何か商売ができたらいいね」なんて話はしていたんです。釣り船をやるのはどうかな、とかね。ただ、実際に起業するとなると、一番大きなハードルが船の購入だったんです。

　そんなとき、船乗り時代の同僚から、クルーズ船を譲ってくれるという申し出があったんですよ。さっそく見に行ったら、船の大きさも形も、僕のイメージにぴったりだったんです。あまりにトントン拍子に話が進んだもんで、「これはもう、やれということなんだな」って都合よく解釈して、開業を決意しました。

　実は、うちがやる前に観光クルーズ船事業を短期間やっていた人がいて、当時からその仕事ぶりを見たり聞いたりしていたんです。なので、そのまま似たような感じで自分たちがアレンジしてやれるんじゃないかっていう思いもありました。

利恵　私は、「主人は船の操縦は貨物船の仕事で慣れてるから大丈夫」って、わりと楽観的に考えてました。主人は以前から「なにか商売をやりたい」って言っていたので、船を譲ってもらえることになったときにはご縁を感じて「これかな」って思いましたね。私自身も接客の仕事が大好きなので、いろんな人と出会える仕事はいいなって思いました。

澄男　こんなこと言ってますけど、最初はこの人にけっこう反対されたんですよ（笑）。やっぱり家庭を預かる身としては、安定したサラリーマン生活を捨てて個人事業主になるっていうことへの不安もありましたしね。

　でも、開業を決めていろんな人と話をするうちに、周りの人たちが協力してくれたんです。知り合いのマグロ養殖業者が「お客さんにマグロの餌やりを見せたら喜ぶんじゃない？」って提案してくれたりね。

　マグロは単価が高い商品ですし、万一トラブルが起こったときの損失が大きいから、普通は嫌がりますよね。でも、僕らは気心の知れた間柄ということもあって、信頼して協力してくれました。今ではツアーの目玉スポットになっています。

　コースを決めるにあたっては、何度も試行錯誤を繰り返しました。普段は何気なく通ってたところを、あらためてお客さんの気持ちで走ってみて、「ここはゆっくり見てみよう」とか、「ちょっと逆から走ってみよう」とかね。特にこだわったのは、「ひと筆書きで走りたい」っていうことです。僕は車でドライブするときにも、1度通った道を戻るのが大嫌いなんですよ（笑）。だから、見どころのスポットをどんなふうにつなげていったらいい感覚で回れるかな、っていうのを僕なりに考えて、できあがった感じですね。

利恵　コースに関しては、もう主人にお任せでした。この島は私にとって地元ではあるんですけども、海からの景色は知らなかったんです。コースづくりを通じて、自分が生まれ育った場所がこんなにきれいなところだっていうのを教えてもらったっていう感じ。だから私が「最初のお客さん」で、誰よりも先に感動をもらったと思っています。

澄男　開業当初は、「本当にお客さまが来てくれるんだろうか？」とか、「自分たちが企画したツアーがお客さまに喜んでもらえるのか？」とか、とにかく不安しかありませんでした。でも、回数を重ねるにつれてアンケー

若松瀬戸は、約30の大小の島々が点在するエリア

夫妻が「エメラルドグリーンの海」と呼ぶおすすめスポット

キリシタン洞窟

トの反応も良くなってきて、次第に自信が持てるようになってきました。

初めてのシーズンを経験してみて感じるのは、やっぱりシニア世代の夫婦が圧倒的に多いということですね。年間を通してコンスタントに予約が入っています。夏休みシーズンには、ファミリーや仲間同士のグループに利用していただいたという感じですね。エリアで言えば、関東圏が6割ぐらい、あとは東海、関西が2割、九州はちょっと少なめかな。

1年目は、宣伝とかがまだ全然やれてなかったので、来シーズンに向けては、それが課題です。ただ、1年間の経験を経て、自信を持ってアピールできるようになった点は強みだと思います。

利恵　私も1シーズンやってみて、お客さまの反応を肌で感じることができたのは、いい経験になったと思います。

コースの途中に、私たちが「エメラルドグリーンの海」と呼んでいるスポットがあるんです。無人島に囲まれていて波が穏やかなので、船の上からテーブルサンゴが見える場所なんですけど、そこでは主人が船の速度を落として通ってくれるんですね。お客さまからは「水族館でしか見たことがないような海の中の様子を、肉眼で見られるのはすごい」って、すごく感動していただきました。

澄男　その場所は無人島に囲まれてるもんで、外側は潮の流れが速いんですけど、潮が島にぶつかって水流が弱まって、そこに砂が堆積してるんです。だから外側と内側の境目は、くっきり線を引いたように海の色が違って見える……それも魅力だと思います。

利恵　海から陸を見ると、シカやイノシシ、野鳥もいっぱいいて、お客さまは「まるでジブリの世界だ！」ってすごく喜んでくれるんです。私たちのおすすめスポットはマグロ養殖やキリシタン洞窟なんですけども、それ以外にも、お客さま自身が発見する「隠れスポット」があるっていうので喜ばれています。私たちにとっては勉強の日々。お客さまからいろんなことを教えてもらっています。お客さまとおしゃべりしている中で、ちょっとしたアドバイスをいただくこともあるんですよ。たとえば、「旦那さんが怒ってるときにはちょっと黙って、嵐が過ぎるのを待ったほうがいいのよ」とかね（笑）。

澄男　海上ならではの視点で眺める楽しさもあるんです。コースの最後に、丘の上に建っている「桐教会」があって、一般的な観光ルートでは、教会から見下ろす海の景色を楽しむんですけど、僕らが案内するのは、海からの目線で建物を見上げる風景。船からは、揺れる水面に映る教会の白い建物も見ることができます。最近では、「ぜひ両方を体験してみたい」というお客さまがけっこういるみたいですね。

海から若松島を眺めることで あらためて見つけた故郷の魅力

利恵　このあたりでは昔から「海で魚を獲る家」と、「山の畑で農作物をつくる家」が分かれているので、魚と野菜を交換する「物々交換の文化」が続いてきたんです。

今でも、たとえば私たちが釣りに行って、たくさん釣れたときにはご近所におすそ分けをします。そしたらお返しに農作物や、家で作ったお惣菜なんかをいただくんですよ。そういう温かいやり取りが残ってるっていうのは島ならではだと思いますね。

澄男　そうね。うちの父親なんか漁船に乗っていて、ひと月のうち25日は漁に出てたんですけど、たまの休みになると趣味で釣りに出かけて行って、獲ってきた魚をご近所に配って歩いてましたね（笑）。

利恵　私は、結婚して海へ連れていってもらうようになって地元の魅力を再発見したんです。若松島へ戻ってきてからも、しばらくは職場と家との往復で、自然の豊かさに気付かなかったんですけど、主人と魚釣りに行くときに海から島を見るようになって、あらためて景色の変化や、季節の移り変わりが素晴らしいと感じられるようになったんです。

釣りも主人に教わりました。私はまったくの素人なんですけど、それでもおもしろいように魚が釣れるんです。それはやっぱり「山からの恵みがあって、海が豊かだ」ということだと思うんですよね。この自然の豊かさを多くの人に伝えたい……その思いが、今の仕事につながっているような気がします。

若松瀬戸を往来する船の安全を祈るように佇む「桐教会」

若い人たちに、島で活躍してもらえる場をつくりたい

澄男　今は若松島でも高齢化が進んでいて、50代の僕らが「若手」に分類される感じなんですよね。なので、この観光クルーズ事業を軌道に乗せることで、若い人たちに島で活躍してもらえるきっかけにしたいと思っています。

島の将来については、IターンとかUターンの方と話す機会が多いですね。やっぱり自分たちと同じように、いったん島を出て、外の情報を持って帰ってきてる人のほうが、話が合う気がします。「地域おこし協力隊」で島へやってきた人たちとも話すんですけど、彼らは本当にポジティブで、一緒に話していると元気をもらえるんです。彼らの目線から見える島の可能性や課題を聞かせてもらうことで、自分たちの意識をブラッシュアップしている感じですね。

今は、福江島から来て1日遊んだ後に、夕方の船で福江や長崎に帰られる方が多くて、なかなか滞在してもらえないんです。そんなこともあって、うちでは「サンセットクルージング」や「星空海上クルージング」もやってるんです。島には夜遊ぶところがないんで、せっかく泊まってくれるお客さんには夜までめいっぱい楽しんでもらいたいな、っていう思いもあって始めたんです。「星空海上クルージング」は、夜8時ぐらいに出航して、風や波の穏やかな場所で船のエンジンを切って、自然の音に浸りながら、ゆったりと星空を眺めてもらうんですよ。

利恵　私も、自分たちの仕事が、島の活性化に少しでも役立てばいいなと思っています。若い人たちにもっと来ていただきたいなと思いますね。

澄男　上五島は、福江島なんかに比べて、おいしい店とか宿泊施設など、旅行に関する情報が格段に少ないと思うんですよ。でも、実際に来てくれたお客さまの声を聞くと、「上五島っていいね。次に来るときは上五島を中心に回ってみよう」って言ってくれる人は意外と多いんですよ。

若い頃は「なにもないこの島から出たい」と思っていましたけど、今は心の底から「なにもないのがこの島の魅力」だと思っています。うちの子供たちが将来、島へ帰るかどうかは子供の価値観に任せたいと思いますが「盆や正月には、疲れを癒しに帰ってこい」って言っています。

この島が、さまざまな人にとっての癒しになり、いつでも「ただいま」って戻ってこれる場所であり続けること……それが僕たちの願いです。

聞き書き
木寺智美さん

島の魅力を多くの人に伝えることで小値賀島の歴史を未来へつなぐ

「運命に導かれて」小値賀島へやってきたという木寺智美さん。
現在では島の生活に溶け込み、島民の一人として、島の課題解決のために奮闘する日々を送っています。「おぢか島旅コンシェルジュ」として、観光客と島の人びとをつなげる役割を担う木寺さんは、「小値賀の外にいて、小値賀を好きな人」を増やしていきたいと語ります。そんな木寺さんに、小値賀島での生活と課題、今後の展望について聞きました。

きでら・ともみ／1986年生まれ。神奈川県平塚市出身。東京でSEとして仕事をした後、2011年、株式会社小値賀観光まちづくり公社に入社。現在はNPO法人おぢかアイランドツーリズム協会の「おぢか島旅コンシェルジュ」として、来島者の旅のサポートや広報活動を行っている。

慌ただしい日々の中でふと浮かんだ疑問

25歳のときに小値賀島へ来て、現在は、NPO法人おぢかアイランドツーリズム協会で、島暮らし体験を通して島の文化・自然・景観などを未来に残し伝え、町が元気になるためのさまざまな活動を行っています。

東京で一人暮らしをしながら慌ただしい日々を過ごすうち、「自然のなかで仕事がしたい」っていう思いが芽生えてきたんです。

当時は渋谷の近くに会社の寮があったんですけど、部屋から高層ビルが見えて、街が明るいから夜中でもカラスが鳴いてるような場所でした。そんなある日、ふと、「これからもずっとここで生きつづけるのかな？」って疑問を感じたんです。それで「もう少し人間らしい生活がしたいな」って思いはじめたのが、離島暮らしを始めたきっかけです。

小値賀の町並み。どこか懐かしさを感じさせる

私、神奈川の田舎育ちなんですよ。神奈川っていうと、こっちの人は決まって「すごい都会だね」って言うんですけど。特に中学生のときは山奥で寮生活してたので、満天の星空を見て感動した思い出とか、すごい記憶に残ってるんです。やっぱり幼少期に自然の中で暮らしてたっていうのが根本的にあるのかもしれません。

でも、最初は別に「移住したい」って考えていたわけじゃなかったんです。2011年に東日本大震災があって、世の中の多くの人たちが「これまでの生き方を見直してみよう」と思っていたタイミングでした。本屋さんで雑誌を手に取ると「離島で生きる」とか「地方で生きる」とか、そういう特集記事が多かったんですよね。で、読んでみると、島は日本の縮図で、すべてが島内で完結してる世界で、自然も豊かで……って。なんかちょっとおもしろいなって思いました。世の中の情勢と、私が「今の生活を変えたい」と思ったタイミングがぴったり合ったっていうのが大きかったかなと思います。

それからは、求人サイトとかインターネットを見ていると、なぜか「小値賀島」っていう文字が目に飛び込んでくるようになって、まるで導かれてるような感じでした。といっても、行ってみないとなにもわからないと思って、小値賀島に行ってみることにしたんです。

で、小値賀島に向かう船の中で、おぢかアイランドツーリズムというNPOが、エコツーリズムの研修生を募集していることを知ったんです。実はそのときは「エコツーリズム」って言葉も知らなかったんですけど、調べてみると、地域の自然や歴史・文化の魅力を観光客に伝えることで地域活性につなげる取り組みのことらしい。それを知って「ほぉ、そんな世界があるんや！」って感激したんです。こんな職業で生きていけるなら素晴らしいな、って。

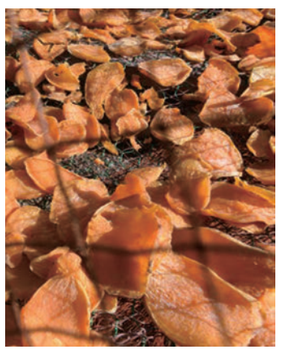
しかも、その仕事を、今から行こうとしている小値賀島で募集してるなんて「まさにこれは運命だ！」って思って、港に上陸するときには、ガッチリ心は固まってました。

ただ、実際に話を聞いてみると、3ヶ月の期間限定で、環境省の「エコツーリズムガイド育成研修」の受講者を募集しているということでした。その後の就職が約束されているわけではなかったんですけど、手続きの書類を提出しました。

島の人たちのあたたかさに触れ小値賀島に魅了される

そのときは2泊3日の滞在だったんですけど、民泊のお母さんがすごいあたたかくもてなしてくれたんです。翌日は野崎島に行ったんですけど、お昼のお弁当を作ってくれて、お茶菓子も持たせてくれて、息子さんも港まで来てくれて……島の人たちの「包容力の高さ」みたいなのをすごく感じましたね。

で、東京に戻って3週間後に、「アイランダー」っていうイベントに参加しました。小値賀に行ったときに「東京でこういうイベントがあって、小値賀も出展するからおいでよ」って誘ってもらったんです。なんで、ちょっとのぞきに行く、くらいの感覚で参加したんですけど。ブースに行って「私、この間小値賀島に行ったんです」って言ったら、「おぉ、よく来たよく来た！」って感じで、いきなり黄色い法被（はっぴ）を着せられて、気がついたら一緒にパンフレット配ってました（笑）。このときのことを、私は「小値賀に抱かれた」っていつも言ってるんですけど、島の仲間に入れてもらったような感じがして、すっ



サツマイモをスライスして天日と寒風で干した「かんころ」。特産品「かんころ餅」の材料となる

ごくうれしかったですね。

その後、神戸での「エコツーリズムガイド育成研修」の全体研修を経て、小値賀で2ヶ月間、研修を受けました。「おぢかアイランドツーリズムの活動は、小値賀島を次世代に残すためにやっている仕事です」というベースの部分を理解したうえで、島の魅力を来訪したお客さまにどのように伝えるか、単に自然や歴史について語るんじゃなくて、インタープリター的にどういうメッセージを伝えるかが大切だということなどを教えていただきました。私はそれまで勉強がすごい苦手だし嫌いだったんですけど、このときは「自ら学びたい」って気持ちになってたのが、自分でも驚きでしたね。

正社員として採用されて、移住して働きはじめた頃、私の仕事は古民家ステイという島に残る古民家を改修した宿泊施設の掃除が中心でした。それって傍から見たら、なんか地味な仕事じゃないですか。でも、今でも覚えてるんですけど、外で雑巾を干しながら「私はなんて幸せなんだ!」って、しみじみ感じたんですよね。

だって、空も海もキラキラ輝いてて、鳥はチュンチュン鳴いてるし、陽ざしはぽかぽか暖かいし。時折おじいちゃんがやってきて「なんばしよっとね」とか、「頑張りよるかぁ」とか声をかけてくれる。その声に「はーい、頑張ってますよぉ」って応えながら、なんてほのぼのした生活だろうって……。その頃の日記を見ると、「彼氏なんていらない。ここにいるだけで幸せだ」みたいなこと書いてるんですよ（笑）。

それは今でも変わらなくて、事務所でも夕陽がきれいな日には、誰かが「今日、夕陽きれいだよ!」みたいな感じで教えてくれて、みんなで外に出て写真撮ったりとか、「ちょっと海行こう」とか言って海を眺めたりとか……日常生活の中で、母なる大自然を感じられるのはすごく幸せですね。

現在は「おぢか島旅コンシェルジュ」として、来島されるお客さまのご要望を詳しくうかがって、やりとりを重ねながら、オリジナルの島旅プランをご提案する仕事をしています。

たとえばお客さまから「島の人と交流したい」というご要望があった場合、「しっかり交流したい」という方には、民泊でのホームステイをおすすめします。「ほどよい距離感を保ちたい」という方には、島のお母さんに宿泊先へ来てもらって一緒に料理を作る体験もできますよ、と、おすすめするんです。そんなふうに、お客さまの要望に応じて、旅の形を作り上げていく仕事がメインですね。

小値賀で民泊事業が始まってから今年で20年になるんですけど、それを支えてきたのは、やっぱり、旅の人をあたたかく迎え入れる島民性だと思います。小値賀島は、古くは遣唐使、近代は捕鯨船の寄港地として、海上交通の要所だったんです。いろんな地域から多様な人たちが島を出入りしてきた歴史があるから、外から来た人たちを「どっから来たとね?」って受け入れるおおらかな風土が根付いているんですね。

実際、島の人たちからも、「昔は、よそから来た巻き網漁船の漁師たちを家に泊めて、ごはんを食べさせてあげた」なんて話をよく聞くんです。

だから小値賀に来られるお客さまは、2度、3度と訪れる方が多いんですよ。それはやっぱり「人とつながることができる」からだと思います。「また会いに行く」という感覚になるからですね。

よく民泊のお母さんたちから、「今も年賀状のやり取りをしてるよ」とか、「結婚式に招待してもらったんだ」なんて話を聞くんですけど、そんな話を聞くたびに、この仕事の魅力を、あらためて感じています。

島を未来へ受け継いでいくために自分になにができるだろう?

よく「離島は日本の縮図」と言われますけど、この島でも人口減少はすごいスピードで進んでいます。1年に100人ぐらいのペースで人口が減ってるんです。もちろん、高校を卒業した子供たちが島を離れることもあるんですけど、やっぱり亡くなる方が多いんですよね。私が小値賀に来て間もない頃に思ったのは「喪服を買わなきゃ」っていうことでした。日頃お世話になっている人たちが亡くなったり、長く商売を続けてきたお店が閉店したりするのを見ることは、住民の一人として辛いことですよね。

格子窓の並ぶ港町にある古民家「先小路（さきしょうじ）」の室内

高齢化のほかにも、たとえば磯焼けで魚が捕れなくなって漁師さんが減ってるとか、少子化で学校が存続できなくなりそうとか、空き家の問題とか、島で起こっているすべての問題を「自分事」として受け止めないと難しいというか、私たちの仕事は思いっきりそういうところなので、やりがいを感じています。

小値賀島って、旧石器時代から一度も人の暮らしが途絶えたことがないそうなんです。小さな島だけど、四方を海に囲まれているから海産物がいっぱい獲れて、田んぼや畑もあって自給自足が可能。そして、島の全域に集落が点在していて、それぞれの集落に特色がある……こんな魅力のある島を途絶えさせるわけにはいかない、どうにか残していきたいなって思います。その中で「自分になにができるのかな?」ということは、常に考えていますね。

やっぱり、島に魅力があって、楽しくて、島の人たちが生き生きしていたら、遊びに行きたくなりますよね。人口は少なくても、なにか惹かれるものがあったら、きっと来てくださると思うんです。よく関係人口とか交流人口っていいますけど、やっぱり「小値賀の外にいて、小値賀を好きな人」を増やしていくっていう形がベストなんでしょうね。

島で生まれ育った子供たちに「小値賀で働きたい」と思ってほしい

私自身は今まで、ここが国立公園だと意識することはなかったんですけど、2018年に同じ小値賀町の野崎島が世界文化遺産に登録されたことをきっかけに、意識するようになりました。というのも、野崎島が国立公園であり、国の重要文化的景観であり、世界文化遺産にも指定されている唯一無二の場所となったからなんです。

火山由来の鉄分を多く含んだ砂礫が特徴の赤浜海岸

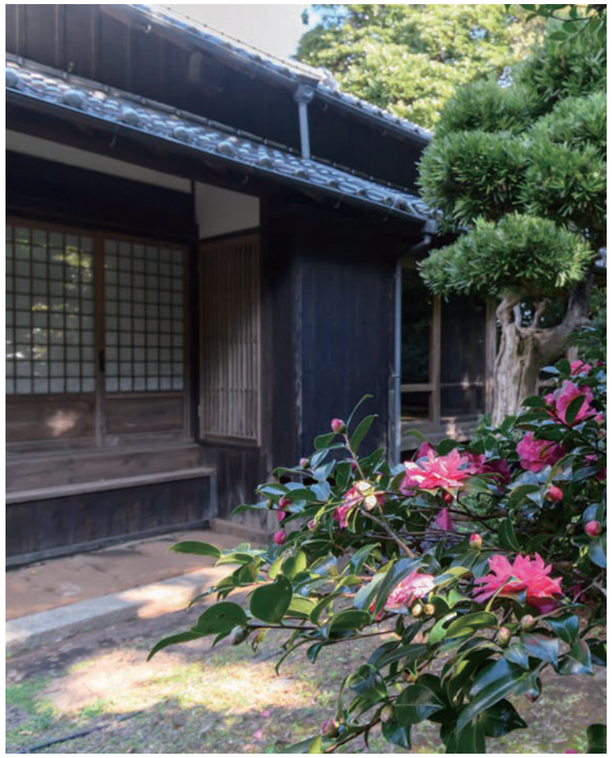
もともと小値賀町が「豊かな自然」という地域資源を活用して観光に力を入れようとしたのは、国立公園に認定されたのも大きなきっかけの一つなのではと思うんです。町の昔の資料とか見てると「西海国立公園小値賀町」というワードがめっちゃ出てくるんですよ。「平成の大合併」のときに、合併しないことを選んだのも、町民たちの意識の中に自分たちが暮らしているこの地域への誇りがあったからなんだろうなと思います。

これからも、島にある昔ながらのものを、上手に支えることで、島を存続させるための活動を続けていきたいと思っています。

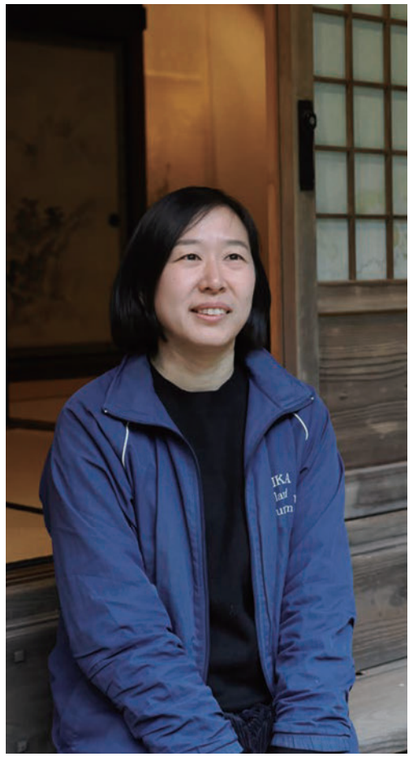
小値賀の子たちは、学校の授業で「この島は、観光業を通じて暮らしの糧を得るしくみをつくることが大切なんだ」ということを学んでいます。島には職業の選択肢が少ないので、視野を広げるためにも、一度はやっぱり外に出た方がいいのかなと思いますけど、のびのびと生きて、のびのびと将来の選択をしてほしいなと思います。そして、その結果として「小値賀で働きたい」「おぢかアイランドツーリズムで働きたい」と思ってもらえたらうれしいですね。

そのためには、私たち大人が生き生きと楽しそうに仕事をして、その姿を見てもらうことが大切なんですよね、きっと。

実は私、畑でのんびり土いじりをする生活に憧れているんですけど、今は仕事が楽しくて仕方ないんです。だから、畑仕事は当分の間、お預けになりそうですね（笑）。



古民家「親家（おやけ）」の外観。12月にはツバキが美しく咲く



お客さまの要望にあわせて島旅プランを提案する

聞き書き
福見直樹さん

地元のダイビング仲間を増やして まだ見ぬ「五島の宝」を見つけたい

「五島の海には、まだまだ可能性があるんですよ」
福江島でダイビングショップを経営する福見直樹さんは、目を輝かせながら、そう語ってくれました。地元の漁業者と根気強く対話を重ね、海を守る仕事に取り組みながらダイビングの普及に取り組んできた甲斐あって、今では日本全国からダイバーが集まっています。そんな福見さんに、五島の海の魅力や海洋環境の変化、今後の展望などについて聞きました。

ふくみ・なおき／1980年生まれ。長崎県五島市出身。2008年、ダイビングショップ「マリンサポート五島海友」を開業。日本全国から集まるダイバーたちに五島の海の魅力を伝えている。2010年、多々良島付近の海域で、世界最大級のオオスリバチサンゴを発見。

父が生まれた久賀島（ひさかじま）で海の楽しさを知る

福江島で生まれ育ち、現在、「マリンサポート五島海友」というダイビングショップを経営しています。

親父が隣の久賀島の出身で、幼い頃は夏休みになると親父の実家に行くのが楽しみだったですね。祖父がちっちゃい船を持ってて、遊びに行ったりすると船で泳ぎに連れていってもらったり、釣りに連れていってもらったり……。久賀島は台風の影響とかがあるので、お盆に稲刈りをするんですよね。親が帰省するのに合わせて稲刈りとかをするので1週間ぐらいいて、自分も稲刈りの手伝いをしたりして、終わったら海や川で泳ぐんです。

近くの川には、カニとかハヤとかがいっぱいいて、竹の棒に糸と針を付けただけの簡単な竿で、米粒を餌にして釣りをするんですけど、ほんとおもしろいように釣れるんです。あとは海に潜ってサザエを獲ったりとか……そういうのが楽しかったですね。

サザエは、大きなものだと握り拳ぐらいの大きさのやつもありました。獲るのは自分たちが食べる分ぐらいですけど、多いときは20個ぐらい獲れました。それをおじいちゃんちに持ち帰って晩のおかずにするんです。

柔道を始めたのは、2歳上の兄の影響です。親が兄を道場へ送り迎えするときに一緒に連れていってもらってたんで、そのまま自分も入門しました。3歳のときですね。柔道の練習が始まるのが5時とか5時半だったんで、その前に海で泳いでから練習に行くというスタイルが夏の定番でしたね。

その後、自分は大学まで19年間、柔道を続けました。福江島を離れたのは、中学校を卒業して高校に入るときですね。長崎市にある瓊浦（けいほ）高校に進んで、寮暮らしをしながら3年間、柔道に打ち込みました。高校では長崎県の代表のチームに選ばれて、その後、北九州市の九州共立大学に進んで、卒業後は実業団で柔道を続けるつもりだったんです。

ところが、自分が大学1年生のときに、突然、兄が亡くなって、別の道を歩むことになりました。

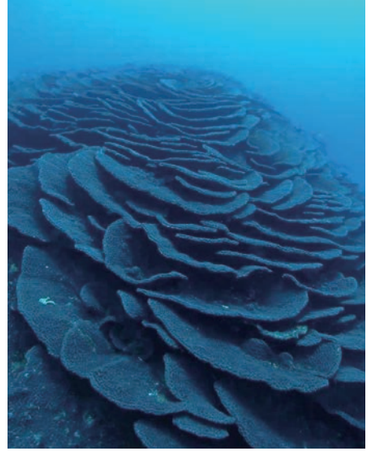
兄は専門学校でダイビングを学び、インストラクター資格を取って、ゆくゆくは五島でダイビングショップを経営する計画だったんです。ところが、その修業のために沖縄のショップに勤めていたとき、素潜りの訓練中にブラックアウトして亡くなったんです。ブラックアウトっていうのは、柔道で言う「落ちた」状態、つまり失神した状態ですから、今にして思えば、そのとき適切に蘇生ができてれば助かってたかも……なんて思うこともありますね。

兄の事故を受けて、自分は福江島に帰ることを決意しました。自分も海が好きだったし、当時はまだ福江ではダイビングが盛んじゃなかったから、ダイビングショップをやろうかなっていうところですかね。

それで、インストラクターの資格を取るために福岡のダイビングショップに勤めました。専門学校に行くとライセンス取得までに2年とか3年かかるんですけど、ダイビングショップだと1年ぐらいで取れるんで、そこに決めたんです。

故郷・福江島に戻って ダイビングショップを開業

資格を取った後は、福岡の別のダイビングショップで4年間、経営のノウハウについて勉強しました。ダイビングショップって、もちろんダイビングに関する知識や技術も必要ですけど、ツアーを企画したり、営業や販売もしないといけないんです。やけん「4年後には五島でショップを経営したいんです」ってお願いして、鍛えてもらいました。で、2007年に島へ戻ってきて、翌年の5月10日、「五島の日」に開業したんです。



世界最大級のオオスリバチサンゴ。直径約14m、高さ約6m

でも、やっぱ最初の2、3年は厳しかったですね。このあたりは、冬場は寒いからどうしてもお客さんも減ってくるんで、レジャー客を相手に通年営業は難しいんです。だから、原発の取水口に潜って貝類のかき落とし作業をするとか、いろんな潜水作業を請け負って生活してましたね。

あと困ったのは、近隣の漁師さんからするとダイビングのイメージがあんまり良くなかったことですね。

そもそも漁師さんって、よその人が海に来たりするのを嫌うからですね。ましてやタンクを背負って海に入られるっていうのが嫌だと思うんですよね。やけん、最初は非常にやりづらい環境でしたね。

自分はあらかじめそういう話も聞いてたし、開業当時は自分の船も持ってなかったから、最初は「漁師さんの船を有料で借りて営

業したいんです」なんていう話もしたけど、まったく聞く耳持ってもらえなかったですね。なんで、観光協会とか、市の水産課とかにも相談したんですけど、やっぱ海では、そのエリアの漁業権を持ってる漁師さんが一番強いんで「うまいことやってくれ」みたいなことしか言われなかったですね。

その後は、漁師さんが定置網を設置する仕事を手伝わせてもらったりして、ちょっとずつ信頼関係ができてきて、潜れるポイントも増えてきている感じですね。実は今日も、つながりのできた漁師さんと一緒に、さっきまでウニの駆除作業をしてたんですよ。

そんなわけで、開業から間もない時期はなかなか厳しかったけども、お客さんの数で言ったら、今は開業時の7倍ぐらいにはなってるかな。

最近は、地元でもダイビングを楽しむ人がちょっとずつ増えてきてるんです。あとは転勤族の人たちが増えてきましたね。

都会から来て、「海がすぐ近くにあるからダイビングをやってみたい」っていう人は多いんですけど、実際に始めるにはなにをどうしたらいいのかがわからない、という状態なんですよ。実際、うちに来てくれるお客さんの大半は、「知り合いがダイビングをやってて、その人に紹介されて来た」という人ですね。今でこそ名前が知られてきてますけど、当時は「五島にダイビングショップあったの？」っていう感じでした。最近ではネットを見て来られる方も増えてきてますね。

オオスリバチサンゴを見つけたのは、２０１０年の10月頃です。

自分らがいつも潜ってる、港から約10分ぐらいの多々良島という大きな島で、ちょっと入り江になってて初心者も潜りやすいようなスポットなんですけど、その日は気心の知れたメンバーだけやったから「たまには反対側行ってみます？」みたいな軽いノリで、普段とは反対の方向へ進んでみたら大きな沈み根（※）があって、そこから砂地をさらに進んでいったら、突然、ドーンと現れたんです。

この話が新聞やテレビに取り上げられたりしたんで、その4、5年後ぐらいからだんだん「行ってみたい」っていう方たちが増えてきました。あとはダイビングショップさんのツアーで来られた方たちがＹｏｕＴｕｂｅに上げてくれたりとか……そういうのでお客さんが増えてきましたね。

発見から10年ぐらい経って、国立環境研究所の研究者の方が調査した結果、世界最大級のオオスリバチサンゴだと判明したんです。直径は約14メートル、高さ約6メートル。６００年ぐらいかけて成長したものだっていうことです。

話題のダイビングスポットと言えば、ここには沈没船が見られる場所もあるんですよ。韓国の貨物船で、フィリピンから韓国へ丸太を運んでいる途中で低気圧に遭ってひっくり返ってしまったみたいです。沖縄の古宇利島（こうりじま）沖にもエモンズっていう沈没船があるんですけど、それは全長１０６メートルなんです。

福江港から約 5kmのところにある多々良島。この島の湾内でオオスリバチサンゴが発見された

ここで見つかったのは全長１２０メートルですから、日本最大級なんです。沈没船って、なかなかあるとこ少ないから、ひとつの売りにさせてもらってる感じですね。

ただ、沈没船は深い場所にあるんで、それなりの経験があって中級ぐらいのライセンスを持ってる方じゃないと連れていけない。特別なポイントなんです。オオスリバチサンゴのほうは、初級ライセンスでも大丈夫ですけどね。

※　水中に沈んでいる岩礁

ダイバーだからこそ気付く海の環境の変化

最近は、海水温が上がっているせいか、サンゴの種類が増えてますね。昔はテーブルサンゴなんてめったに見なかったけど、今はけっこう多いですもんね。あとは海藻が極端に減ってます。「磯焼け」ですね。海水温が高すぎて海藻が死んでしまったり、魚やウニが食べてしまうんです。昔は食べられてもモリモリに生えてたから、そんなに影響なかったんですけど、今は、もともと海藻が少ないのに、芽が出たらすぐ食べられちゃうって感じです。海藻は、たとえばイカの産卵場所になったり、魚の住処（すみか）になったりしますから、漁業や生態系への影響が深刻なんですよね。

なんで、今は海藻を食べるメジナやアイゴ、イスズミなんかが入ってこれないように、海藻の周りをネットで囲ったり、ウニの駆除をしたりして、ちょっとずつ対策をやってる状況です。自分らが携わってるのはここ2、3年なんですけど、五島ではもう5年ぐらい続けてて、効果は出てるみたいです。専門家の

沈没船の実測データから 3D プリンタで作成された模型

調査によると、海藻が繁茂する距離が4キロメートルぐらい増えてるっていう話ですね。

ここが国立公園だっていう意識ですか？自分なんかはもともと「五島全部が国立公園」って思ってたんですよ。で、こっちへ帰ってきてから環境省の方に聞いてみたら、長崎のほうにもあるし、五島でも入ってない地域があるじゃないですか。やけん、多分みんなわかってないんじゃないかなと思いますよ。環境とか自然に関心がある人は知ってると思うんですけど、ほとんどの人は知らないんじゃないですかね。

体験教室などを通じて地元のダイビング仲間を増やしたい

今後は、五島のダイビング人口を増やしていきたいですね。

今自分らが潜ってる海域って、五島の中でもほんのわずかなエリアなんです。まだ開拓されてないんですよね。他のとこに行けば、それこそオオスリバチサンゴや沈没船みたいに、たとえば大きな珊瑚礁だったり、また新しい「宝物」が見つかったりすると思うんで、そういう意味では、まだまだ可能性がある海域だなと。もっといろんな所で潜れれば、すごい発見があるんじゃないかなと思うんですよね。

自分としては、もっと地元の人にダイビングの楽しみを知ってほしいんですけど、「地元だから身近すぎて興味がない」っていうこともありますよね。自分も沖縄の離島にいたことがあるんですけど、ほとんど地元の人いなかったですもんね。

なんとか地元のダイビング愛好家を増やしたいと思って、観光協会に行って相談したりしてるんですけど、結局は本人次第ですからね。やけん、入口をわかりやすくして、まずは夏の体験プログラムで楽しさを知ってもらって、はまったら「ライセンス取れば？」みたいな感じで勧誘するとかですね。

自分、子供3人いるんですけど、夏場とかは「友だち連れて来い！」っつって海へ連れていくんですよ。それでサンゴを見せたりとか。そんな経験、なかなかできないじゃないですか。そういうのを増やせればなとは思うんですけど、やっぱ危ないからって反対する親も多いんですよね。

うちの一番下の男の子は5年生なんですけど、海が好きで、船が満席じゃないときはついてくるんですよね。来たら来たで自分もいろいろ教えたりするんですけど、けっこう魚の名前とか覚えてるんですよ。だから興味はあるとは思うんですよね。長女は海が苦手というか、たぶん日焼けが嫌とかね。来年、高校生なんですけども、あんまり興味がない感じですね（笑）。

でも、開業した頃を思えば、漁師さんたちとの信頼関係も少しずつできてきてるし、お客さんも増えてきてるんで、これからも地道にダイビングのファンを増やしていけたらいいですね。

編集後記

「海藻が減った」本誌の取材中どこに行ってもこの言葉を耳にしました。そして、日々に藻場の減少を気にされていました。雑談の中での一言でしたが、それが強く印象に残っています。海とともに生きてきた地域であることを強く感じました。

『海と生きる、自然とともに紡ぐ時間 ―国立公園ものがたり―』を編集するにあたって、西海国立公園に暮らす6組の方々にこれまでの人生について伺いました。出身も経歴も、現在の職業もそれぞれ違いましたが、共通していたことはどなたもこの地域が大好きだということ。進学や就職等で一度は地元を離れた方でも、この地の魅力に気付き自分らしく生きていたため、どなたも輝いていました。子供の頃から海や磯で遊び、新鮮な海や山の恵をいただき、鳥の渡りで季節を感じる。物々交換など、住民同士の温かい交流もある。取材中、「ここはなにもない場所だから」と言いながらも、この地域には都会では感じることのできない唯一無二の体験や時間が多く詰まっていました。本誌をご覧になったみなさんも、この地域での思い出や感動がたくさんあるのではないでしょうか。この度は限られた方への取材ではありましたが、みなさんが感じている地域の魅力を私たちも一緒に感じることができ、とても嬉しく思っています。

西海国立公園は2025年3月16日で、指定70周年となりました。この国立公園の公園区域は海が大部分を占めているため、実際に西海国立公園を意識されている方は少ないかもしれません。しかし、その意識がなくても自発的に環境の変化を感じ取り、藻場を荒らすウニの駆除作業や島に漂着するゴミの回収、動植物の調査などが行われ、人の手によって自然が守られているからこそ、今日の西海国立公園の美しさがあるのだと感じています。そして今、この地域に暮らす人々によって、自然を生かしたさまざまな観光コンテンツが生み出されて、訪れた方もこの地域の魅力に気付きだしています。これからの西海国立公園がどのように発展していくのか楽しみで仕方ありません。末尾になりましたが、ここまで本誌を読んでいただいた読者のみなさん、そして取材にご協力いただいた西海国立公園とともに暮らすみなさん、本当にありがとうございました。

株式会社オールアバウト

西海国立公園
海と生きる、
自然とともに紡ぐ時間
国立公園ものがたり

発行月 ……2025年3月 第1刷発行
発行元 ……環境省自然環境局国立公園課国立公園利用推進室
東京都千代田区霞が関1-2-2 中央合同庁舎5号館
TEL 03-5521-8271
https://www.env.go.jp/nature/national parks/
企画・編集元 ……株式会社オールアバウト
東京都渋谷区恵比寿南1-15-1
A-PLACE恵比寿南3F
https://corp.allabout.co.jp/

全体管理 ……子上知穂・五十嵐亮太
編集主幹 ……土居里佳
デザイン進行 ……吉田拓実
アートディレクション 鈴木美里
デザイン ……青砥美穂子（Hueprine）
西菜花（株式会社CON）
村上三千雄（VILLAGEUP）
コーディネート・執筆 梅澤聡
撮影 ……久我秀樹（久我写真事務所）
校正 ……天川佳代子
写真提供 ……宮本博文
伊藤一喜
福見直樹
邑上益朗

この印刷物は、グリーン購入法に基づく基本方針における「印刷」に係る判断の基準にしたがい、
印刷用の紙へのリサイクルに適した材料［Aランク］のみを用いて作製しています。

九州・沖縄